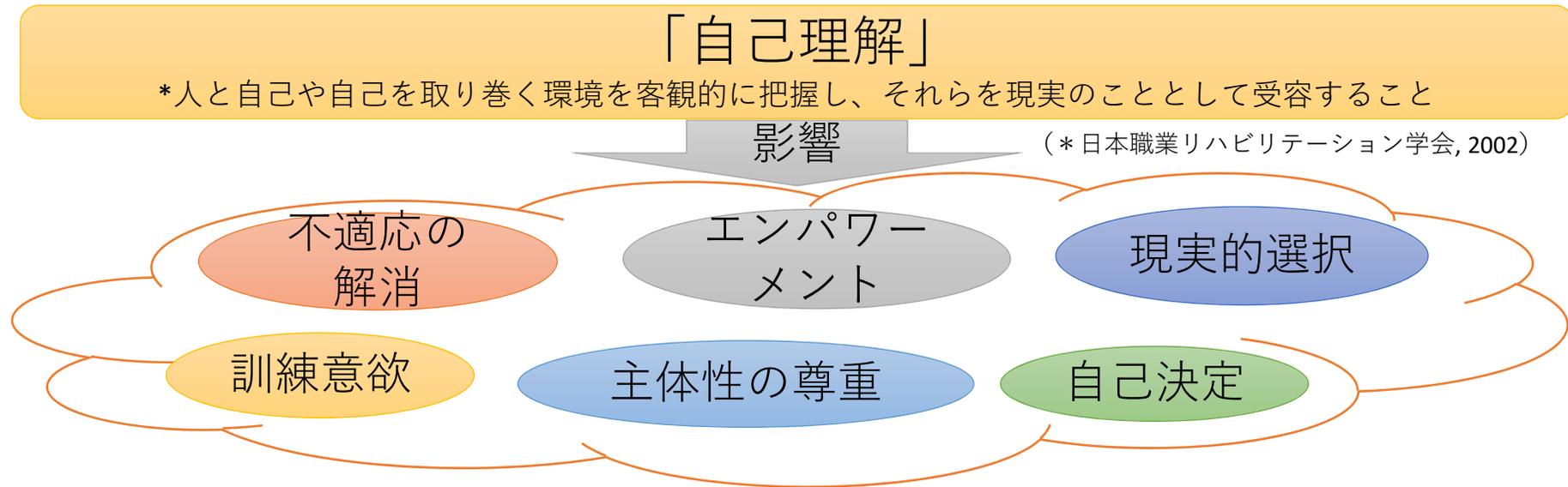


令和6年9月27日
職業リハビリテーション研究発表会（鳥取）

高次脳機能障害者の障害理解と 職業リハビリテーション支援に関する研究 ー自己理解の適切な捉え方と支援のあり方ー

障害者職業総合センター研究部門（社会的支援部門）

背景①：職業リハ支援現場における「自己理解」とその支援の実態を明らかにする必要性



➡ 「自己理解」に着目することが重要

一方で・・・

職業リハ支援現場において高次脳機能障害者の「自己理解」について必ずしも共通理解があるとは言えない

- 職業リハ従事者が高次脳機能障害者の支援で用いている「自己理解」の捉え方や支援の実態を明らかにする必要性
→方法①第1次フォーカスグループインタビュー（第1次FG）

背景②：医療等領域における「障害理解」の概念や支援に関する知見や動向の整理の必要性

- 医療等領域でも、高次脳機能障害者の「障害理解」*の問題が着目され、それに関する概念モデルや支援のあり方について研究が発展してきている
- 職業リハと医療リハでは、支援の目的や方法論に違いはあるが、「自己理解」の支援と「障害理解」の支援には、共通点も多いと考えられる

➤ 医療等領域における「障害理解」に関する知見や動向を整理することの有用性
→方法②文献調査

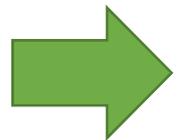
* 自己の障害を認識・理解することが困難であることを指す用語は、「病識低下」「無自覚」「病態失認」「アウェアネス障害」「否認」など様々であるが、本調査報告書では、「障害理解」を使用する。

背景③：高次脳機能障害者の「自己理解」と望ましい支援のあり方を明確にする必要性

背景①②の一方で・・・

◆ 「自己理解」に着目した支援は重要であるが、「自己理解」を深めることがリスクにつながる可能性もある

- 「自己理解」「障害理解」の深化がメンタルヘルス上の問題に結びつく可能性の指摘がある
- 「自己理解」「障害理解」が十分とはいえない状態であっても、職業生活に適応している例も存在する



高次脳機能障害者の「自己理解」と職業リハ支援の望ましい支援のあり方を明らかにする必要性
→本調査の最終目的

本調査報告書における「自己理解」「障害理解」の用語の定義

用語	内容
「自己理解」	<ul style="list-style-type: none">我が国の職業リハに関連する文脈で使用。人と自己や自己を取り巻く環境を客観的に把握し、それらを現実のこととして受容すること。 (日本職業リハビリテーション学会, 2002)
「障害理解」	<ul style="list-style-type: none">国内外の高次脳機能障害者の医療等領域に関連した文脈で使用。自己の障害やそれに関連する問題についての理解を生物・心理・社会環境的な視点から広く捉える。①障害に関する知識、②仕事や日常生活における障害の機能的意味合い、③現実的な目標を設定する能力(Fleming & Strong, 1995)を含む。

調査研究の目的と方法

目的：高次脳機能障害者の「自己理解」と職業リハ支援の望ましいあり方及び残る課題を明らかにする

支援ポイント：「自己理解」を捉え支援するプロセス

第2次FG結果を踏まえた「支援仮説」の修正

方法③第2次フォーカスグループインタビュー（第2次FG）

職業リハ従事者の意見を集約

支援仮説：「自己理解」を捉え支援するプロセス

方法①第1次FG

職業リハ従事者が高次脳機能障害者の支援で用いている「自己理解」の捉え方や支援の実態を明らかにする

両結果を踏まえて

方法②文献調査

医療等領域における「障害理解」の概念や支援に関する知見や動向を整理する

①第1次FG：職業リハ従事者は「自己理解」をどのように捉え支援し、どのような困難を感じているのか？

◆方法：

10年～20年の業務経験がある障害者職業カウンセラー計15名
3グループに分け、フォーカスグループインタビュー

インタビュー内容

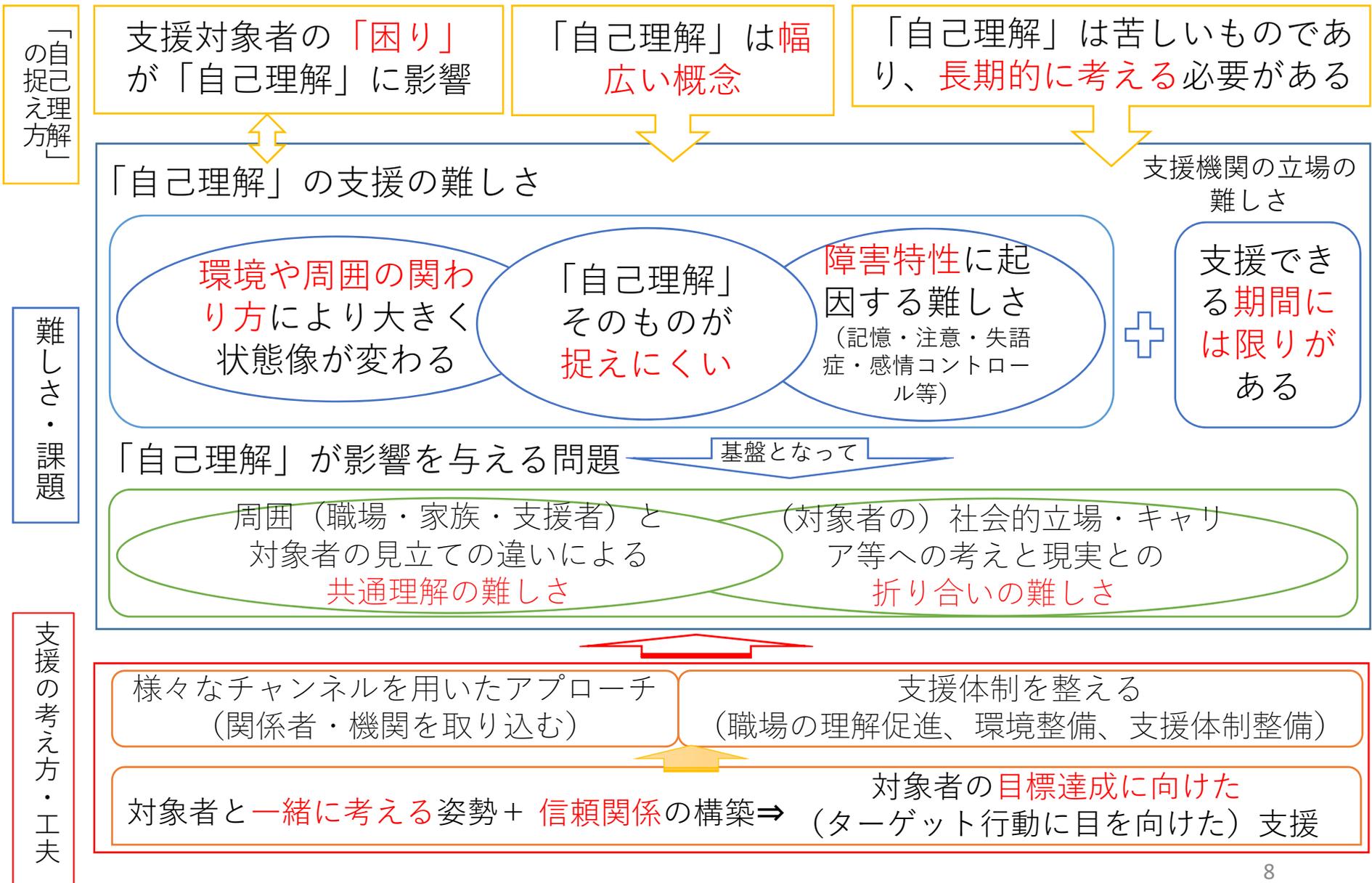
- 質問1：普段の業務で、「自己理解」をどのような意味で使っていますか？
- 質問2：高次脳機能障害者の支援を行う上で、支援対象者の「自己理解」に関連して、あなたが難しさを感じることはありますか？また、そのような状況に対し、あなたが工夫をしたことがあれば教えてください。
- 質問3：支援対象者の「自己理解」が、あなたから見て十分ではなかったが、就職や復職、職場定着が上手くいった事例を経験したことはありますか？その成功を支えたのは何だと思いますか？

(一部省略・統合して提示)

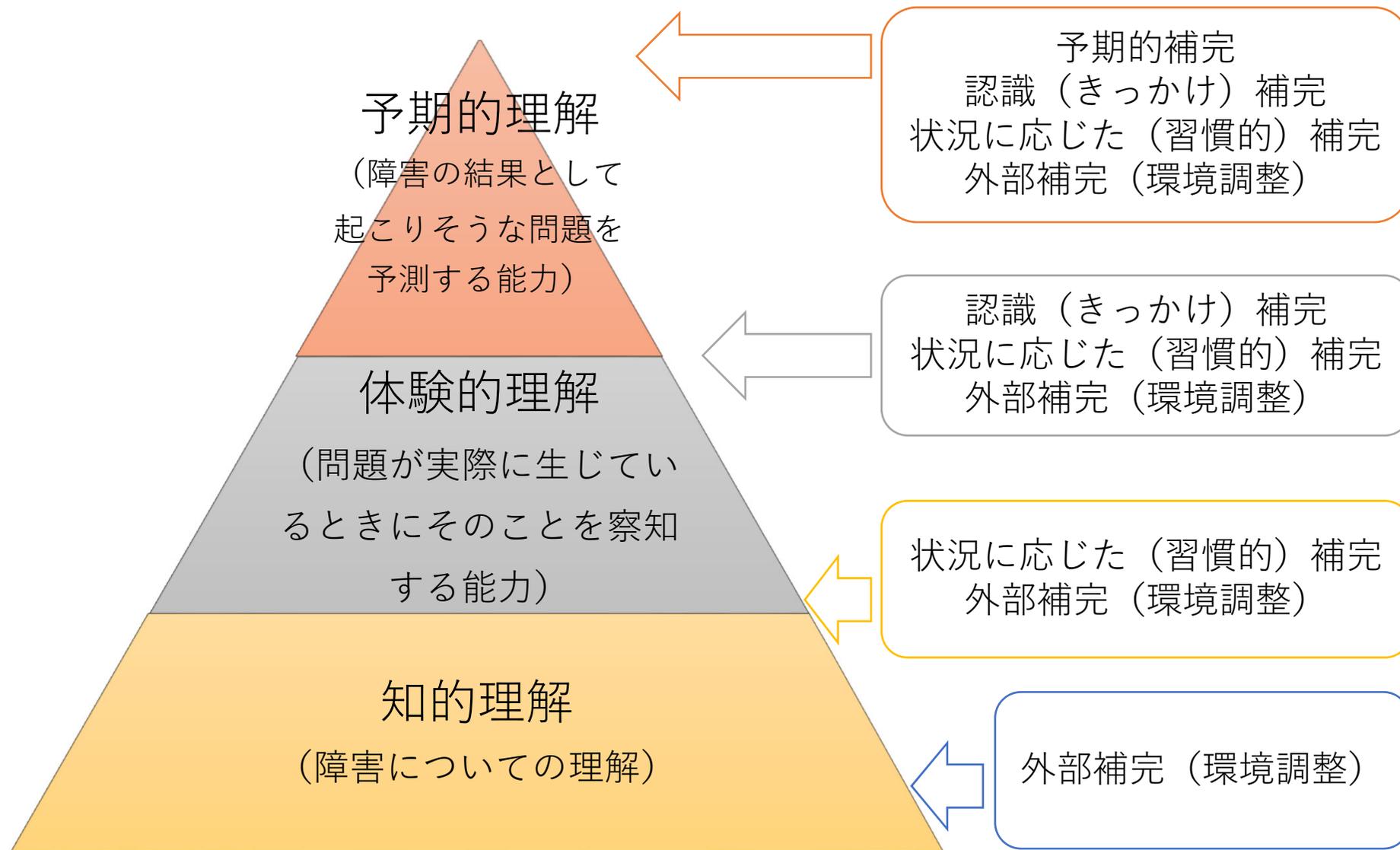
①第1次FG：グループごとの結果

	グループA	グループB	グループC
どのよう に捉えて いるか	「自己理解」は長期 間かかり苦しい作業	「自己理解」は、 対象者の困りや医 師と職リハ従事者 の共通理解が関連	「自己理解」は幅広い 概念であるため、関係 者がどのように捉えて いるか注意が必要
どのよう な支援を 行ってい るか	障害を突きつけず、 対象者とともに考え る姿勢をもち、社会 資源や周囲のサポー トを活用する	関係機関と共通理 解をもって連携し、 ターゲット行動に 目を向けた支援や 環境整備をする	実体験に基づいた整理 を一緒に考える姿勢で 行い、周囲の理解促進、 対象者の意欲・残存能 力・長所に着目する
どのよう な困難を 感じてい るか	「自己理解」に対す る見立てが必ずしも 正確ではないという 自覚から、今までの 対応を不安に思う	支援できる期間は 短期間であるため、 「自己理解」を十 分に進められない	・対象者と周囲の関係 性によって情報収集に 苦慮 ・客観的事実や周囲の 認識との折合いに苦慮

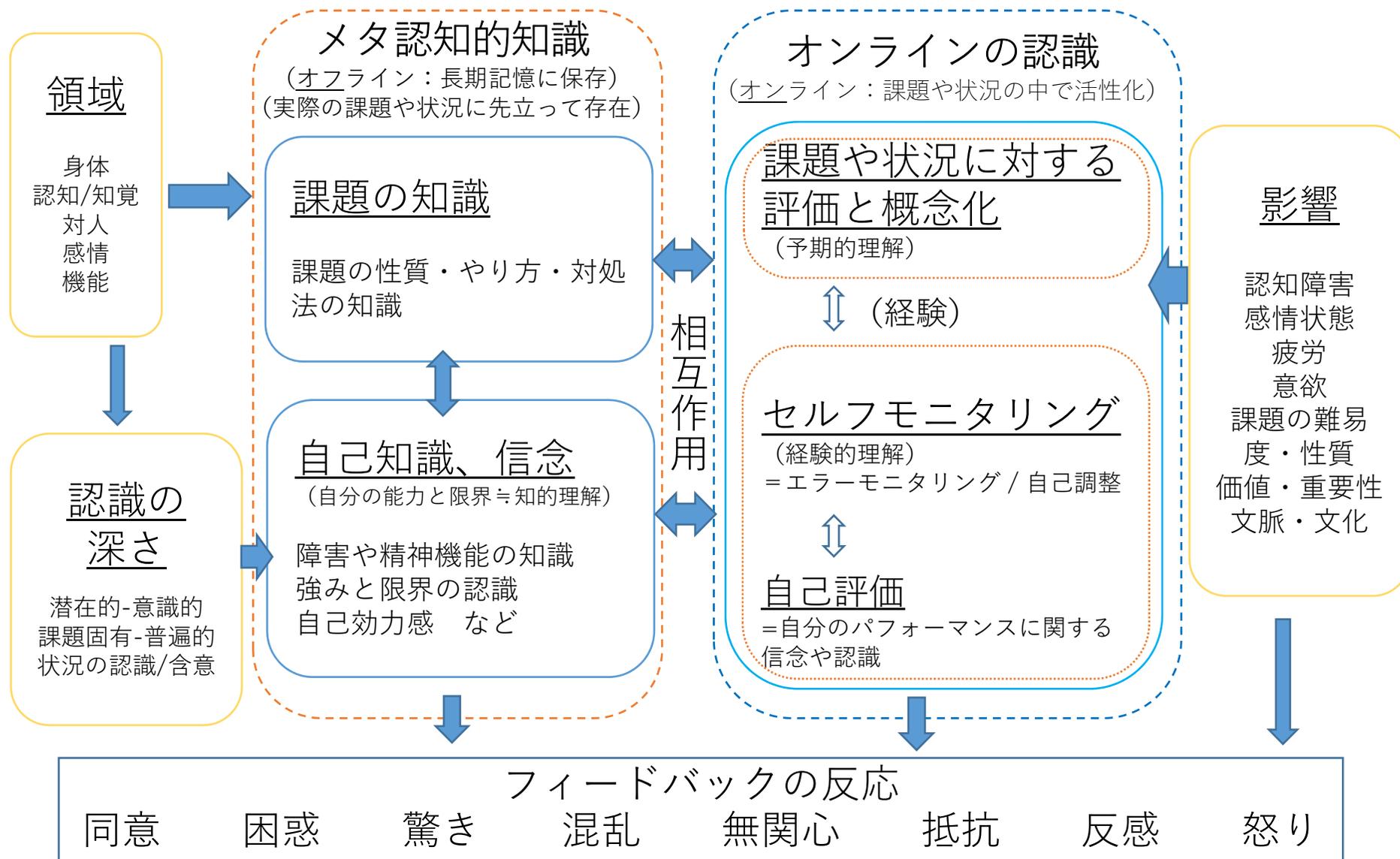
①第1次FG：全体を統合した結果



②文献調査：「障害理解」には3つの階層があり、その程度に応じた補完手段を導入すべき



②文献調査：「障害理解」には様々な側面があり、それらが相互作用して態度に表れる



②文献調査：「障害理解」は生物学的要因だけでなく、心理的要因・社会環境的な要因の影響も受ける

- 右半球又は頭頂葉領域の機能障害

➤ 身体・感覚・認知的な局所性の障害理解に影響

- 前頭葉－頭頂葉システムの損傷

➤ 全般性（認知・行動・情緒など）の障害理解に影響

- 遂行機能又は比較測定メカニズムの障害

➤ オンラインの認識（パフォーマンス中の行動のセルフモニタリング）に影響

生物学的
的要因

心理的
要因

「障害理解」

社会環境
的要因

- 防衛的反応：
否認・回避・抵抗・最小化

➤ 変化を脅威と感じて否認

- 非防衛的反応：
受障前からの性格や対処傾向

➤ 部分的に変化を感じているが、受障前の考え方、反応を踏襲

- 開示することで得るものより失うもの大きいと感じられる環境や状況

- 変化を認識するために必要な情報または機会の不足

- 文化的な価値観

- （評価）課題が障害理解を適切に測れていない

②文献調査：メタ認知的知識とオンラインの認識それぞれに効果的な支援手法

◆メタ認知的知識（知的理解）の向上に効果 (Schrinemakers et al.,2014)

≡気づきの言語化

➤ 日常的な場面を通じたフィードバックや心理教育

効果が示されている手法：ビデオフィードバック (Schmidt et al., 2012)

フィードバックのポイント：ソクラテス式質問法を用いる

◆オンラインの認識の向上に効果 (Engel et al., 2019)

≡行動・態度・社会参加レベルの変化

➤ メタ認知的方略トレーニング (Goverover et al.,2007)

- ・ 課題実行中の自身のパフォーマンスへの気づきを高めること（セルフモニタリングの向上）ができるよう構造化された訓練を通して、課題をうまく行うための対処方略（自己調整）を身につける訓練

②文献調査：「障害理解」を深めるリスクと支援の限界を考慮する必要性

◆メタ認知的知識（知的理解）向上の限界

- ある程度の抽象的推論能力、記憶機能が必要
(Crosson et al.,1989 ; Schrijmemaekers et al.,2014)

◆オンラインの認識向上の限界

- 類似性の低い課題での般化に関するエビデンスがあるとはいえない (Goverver et al. ,2007)

◆「障害理解」の深化と心理的ストレス増大の関係

- 自己の能力低下について判断可能⇒自尊心、自己効力感低下⇒抑うつ・不安 (岡村, 2012)

②文献調査：生物・心理・社会環境的要因を考慮した総合的支援の重要性

①「障害理解」の支援を行う上で前提となること

- 信頼関係を築き、良好な協働関係を確立する (Ownsworth et al.,2017)
- 「障害理解」自体を目的とするのではなく、支援本来の目的を意識する (Toglia & Maeir, 2018)

②生物・心理・社会環境的な要因の影響を考慮した支援

	支援の例
生物	<ul style="list-style-type: none">• 日常的な活動の中で、明確なフィードバックと構造化された体験を提供• 反復学習による習慣形成に重点を置く
心理	<ul style="list-style-type: none">• 不適応行動の修正ではなく、まず適応的な対処法を教える• コントロール感を高めるため、選択肢を複数提示し、対象者が選択• 変化を受け入れようとする言動を認め、強化しながら、目標を徐々に修正
社会環境	<ul style="list-style-type: none">• 本人の家族や友達と話し合いの場を作り、共通理解を深める• 重要な他者に理解を求め、適切なフィードバックとサポートができる環境を整備• ピアグループなど、肯定的な人間関係を感じることができる場所を情報提供

①第1次FGと②文献調査を踏まえた支援仮説 ～「自己理解」を捉えるための視点～

「自己理解」を多様な側面から捉える

障害・苦手についての知識

障害が及ぼす影響についての知識

現実的予測の知識

課題についての知識

方略についての知識

セルフモニタリング
(エラーモニタリング・自己調整)

(課題実行中の) 課題の理解と
パフォーマンスの予測

「自己理解」に影響を与える
要因の考慮

生物学的要因
(機能障害、神経認知的影響)

心理的要因
(障害の否認、受傷前からの性格など)

社会環境的要因
(開示の社会的影響、文化的価値観、
認識に必要な機会の不足など)

「自己理解」の支援の目的を十分に検討

①第1次FGと②文献調査を踏まえた支援仮説 ～支援方法の選択～

前提として持っておくべき 考え方・取組方

- 気持ちに寄り添った支援⇒信頼関係構築
- 対象者の目的達成に向けた支援
- 様々なチャンネルを用いたアプローチ
- 支援体制を整える

支援効果の限界とリスク

- 認知機能障害の影響によりメタ認知的知識の向上に限界がある可能性
- 類似性が低い場面での般化に限界
- 不用意な直面による心理的リスク増大を避ける必要性

考慮した上で選択

支援方法： 「自己理解」深化自体に焦点

- 日常的な活動の中でフィードバックや心理教育
- 課題実行中の自身のパフォーマンスに対する気づきを高める訓練

支援方法： 「自己理解」深化以外に焦点

- 習慣形成に重点を置いたアプローチ
- 心理面に配慮したアプローチ
- 支援等への動機を高めるアプローチ
- 環境・周囲へのアプローチ

③第2次FG：職業リハ実践の経験を踏まえた支援仮説の修正

- ◆ 方法：10年～20年の業務経験がある障害者職業カウンセラー 計17名
3グループに分け、フォーカスグループインタビュー
第1次FGの結果、文献調査の結果、支援仮説をまとめた資料を用いて詳細な説明を行った上でインタビュー実施

インタビュー内容

- 質問1：高次脳機能障害者の「自己理解」の定義やモデルについて、これまでの経験を踏まえ、共感できる点、また実感と異なると感じる点を教えてください。
- 質問2：『「自己理解」を捉え、支援を選択するプロセス』（支援仮説）について質問です。このように「自己理解」を捉え、支援を選択する過程は、普段の業務の中で活用できそうですか。
- 質問3：普段の業務の中で感じる「自己理解」に関連する難しさのうち、残る課題と考えられるところはどのようなところですか。また、その課題に関してどのような支援ができそうですか。これまでの経験を踏まえた考えを教えてください。

③第2次FG：結果

支援仮説を踏まえた支援の有用性

- 実行中の課題における理解（オンラインの認識）に着目した支援の有用性
- 生物・心理・社会環境的視点から「自己理解」を捉えることの重要性
- 対象者との目標共有の工夫
- 社会環境的側面への支援（環境調整、周囲のサポート）の重要性
- 社会資源の活用や職員間の連携を行う必要性

支援仮説に明記すべきポイント

- 残存能力や、補完手段によってできるようになることに着目
- フィードバックの工夫（問題の外在化や一般化を意識する、記録などを用いて一貫性のある相談をする、仕事に関連付けて補完手段を提案する）

残る課題

- 社会資源の活用や連携における課題（社会資源の不足や、支援機関間での共通認識の難しさ）
- 継続的な支援の難しさ
- 障害を就職（復職）先に開示することの工夫と難しさ
- 心理的、社会的側面の把握や見極めの難しさ

③第2次FGの結果を踏まえ作成した「支援ポイント」 ～「自己理解」を捉えるための視点～

「自己理解」を多様な側面から捉える

自己の（障害）特性についての知識

自己の特性が及ぼす影響についての知識

現実的予測の知識

課題についての知識

方略についての知識

セルフモニタリング
(エラーモニタリング・自己調整)

(課題実行中の) 課題の理解と
パフォーマンスの予測

「自己理解」に影響を与える
要因の考慮

生物学的要因
(機能障害、神経認知的影響)

心理的要因
(障害の否認、受障前からの性格など)

社会環境的要因
(開示の社会的影響、文化的価値観、
認識に必要な機会の不足など)

「自己理解」の支援の目的を十分に検討

* 赤字が支援仮説からの修正点

③第2次FGの結果を踏まえ作成した「支援ポイント」 ～支援方法の選択～

前提として持っておくべき 考え方・取組方

- 信頼関係、協働関係の構築
- 対象者の目的達成に向けた支援
- 残存能力や「できようになったこと」に焦点
- 様々なチャンネルを用いたアプローチ
- 長期的な視点を持ち支援体制を整える
- 支援内容や活動の記録を見える化して共有

支援効果の限界とリスク

- 認知機能障害の影響によりメタ認知的知識の向上に限界がある可能性
- 類似性が低い場面での般化に限界
- 不用意な直面による心理的リスク増大を避ける必要性

考慮した上で選択

支援方法： 「自己理解」深化自体に焦点

- 日常的な活動の中でフィードバックや心理教育
- 課題実行中の自身のパフォーマンスに対する気づきを高める訓練

支援方法： 「自己理解」深化以外に焦点

- 習慣形成に重点を置いたアプローチ
- 心理面に配慮したアプローチ
- 支援等への動機を高めるアプローチ
- 環境・周囲へのアプローチ

*赤字が支援仮説からの修正点

【参考】「支援ポイント」の内容の詳細（例）
支援方法の選択：前提として持っておくべき考え方・取組方

考え方・取組方の内容	具体例（第1次FG、第2次FGより）
信頼関係、協働関係の構築	<ul style="list-style-type: none"> • 気持ちに寄り添った支援により信頼関係を構築 • 問題や目標に向けて一緒に考える姿勢をもつ
支援対象者の目標達成に向けた支援	<ul style="list-style-type: none"> • パフォーマンスの向上や社会参加を目標にする • ターゲット行動の解決に目を向けた支援をする
残存能力や「できるようになったこと」に焦点	<ul style="list-style-type: none"> • 補完手段の活用によりできるようになったことが分かるようフィードバックする • 就職（復職）先に「できていること」「こうすればできる」を伝える
様々なチャンネルを用いたアプローチ	<ul style="list-style-type: none"> • 家族、医療機関、仲間など支援対象者にとって重要な他者との関りを通じて「自己理解」を深められるように、社会資源等を活用する
長期的な視点をもち支援体制を整える	<ul style="list-style-type: none"> • 「自己理解」の支援は長期的に見ることが必要との認識をもち、支援機関との連携を図る
支援内容や活動の記録を見える化して共有	<ul style="list-style-type: none"> • 相談内容は紙面に書いて共有。次回相談時に、書いた内容を一緒に確認してから相談を始める

【参考】前提として持っておくべき考え方・取組方の例

- ・失敗の原因を周囲に向けてしまったり、感情コントロールの課題があるような事例では、あえて「自己理解」をテーマにせず、支援対象者が困っているところに焦点を当てた相談を行い、そこから改善策を見つけるようにする。
- ・用紙等を書いて相談する。特に支援対象者が希望している目標、目標に向けた段取り（予測）を整理する。これらの内容は支援者・対象者各々で持ち帰り、次回相談で改めて共有する。

【参考】支援ポイントの内容の詳細（例） 支援方法の選択：「自己理解」深化以外に焦点

支援の種類	支援法の例（第1次FG・第2次FG・文献調査より）
習慣形成に重点を置いたアプローチ	<ul style="list-style-type: none"> 支援対象者の目標とする行動の形成（又は減らすこと）に焦点をあて、反復学習・手順学習を行い習慣を形成する 目標を立て、相談内容を記録し、振り返ること自体を習慣化する
心理的側面を考慮したアプローチ	<ul style="list-style-type: none"> 信頼関係に基づく協働関係構築に軸をおいて支援する 「自己理解」よりも、困っていることへの対処に焦点をあてる 対象者に選択してもらうことでコントロール感を高める 支援対象者にとってある程度の親近性があり、能力を大きく超えないレベルの課題を設定する
支援等への動機を高めるアプローチ	<ul style="list-style-type: none"> 支援対象者にある意欲を探し、適応的目標に繋げる 変化を受け入れようとする言動を認め、強化し、目標を徐々に修正していく 実際の仕事で必要となるスキルと関連付けて補完手段を提案する
環境・周囲のネットワークへのアプローチ	<ul style="list-style-type: none"> 重要な他者に心理教育を行い、障害や関り方についての理解を深めてもらう 重要な他者のストレスを軽減するため、ニーズを聞き解決・解消法を検討する

【参考】 「自己理解」 深化以外に焦点を当てたアプローチの一例

支援等の動機付けを高めるアプローチ

- 「障害の対処法を身につけていきましょう」より、「業務を上手に行う方法を考えてみましょう」という言い方の方が前向きに取り組みやすい。

環境・周囲のネットワークへのアプローチ

- 受け入れ先の職場に、失われた機能や、伸ばすことが難しいところを支援者が伝えると同時に、残っている力で仕事に生かしていけること、環境調整や補完手段を使うことで力を伸ばせる可能性があること、支援対象者が努力している内容を伝える。

結論

1. 職業リハにおける高次脳機能障害者の「自己理解」の捉え方
 - 「自己理解」は、メタ認知的知識とオンラインの認識のような多面的な側面があること、生物・心理・社会環境的要因の影響を受けて対象者の態度に表れるものであることを考慮して捉える必要がある
2. 職業リハ支援の望ましいあり方
 - 信頼関係構築及び支援対象者の目的達成に向けた支援が前提となる
 - 「自己理解」の多面性及び多要因の影響を考慮したアセスメントを行った結果、「自己理解」以外に焦点をあてた支援の選択が必要な場合があることを考慮する
3. 残る課題
 - 長期的な視点で支援を行うには、支援機関の充実・連携強化・ノウハウ向上、職場における理解促進を更に進める必要がある

参考文献

- Crosson, B., Barco, P. P., Velozo, C. A., Bolesta, M. M., Cooper, P. V., Werts, D., & Brobeck, T. C. (1989). Awareness and compensation in postacute head injury rehabilitation. *Journal of Head Trauma Rehabilitation, 4*, 46-54.
- Engel, L., Chui, A., Goverover, Y., & Dawson, D. (2019). Optimising activity and participation outcomes for people with self-awareness impairments related to acquired brain injury: An interventions systematic review. *Neuropsychological Rehabilitation, 29*, 163-198.
- Fleming, J., Strong, J. (1995). Self-Awareness of Deficits following Acquired Brain Injury: Considerations for Rehabilitation. *British Journal of Occupational Therapy, 58*(2), 55-60.
- Fleming, J., Ownsworth, T. (2006). A review of awareness interventions in brain injury rehabilitation. *NEUROPSYCHOLOGICAL REHABILITATION, 16*(4), 474-500.
- Goverover, Y., Johnston, M. V., Togli, J., & Deluca, J. (2007). Treatment to improve self-awareness in persons with acquired brain injury. *Brain Injury, 21*(9), 913-923.
- 日本職業リハビリテーション学会. (2002). 職業リハビリテーション用語集 第2版(第2版):(日本職業リハビリテーション学会 職リハ用語検討研究委員会 (編) .)
- 岡村陽子. (2012). セルフアウェアネスと心理的ストレス. *高次脳機能研究* 32, 438-445.
- Ownsworth, T. & Clare, L. (2006). The association between awareness deficits and rehabilitation outcome following acquired brain injury. *Clinical Psychology Review, 26*(6), 783-795.

参考文献

- Ownsworth, T., Fleming, J., Tate, R., Beadle, E., Griffin, J., Kendall, M., . . . Shum, D. H. (2017). Do people with severe traumatic brain injury benefit from making errors? A randomized controlled trial of error-based and errorless learning. *Neurorehabilitation and Neural Repair*, 1072-1082.
- Schrijnemaekers, A-C., Smeets, S. M., Ponds, R. W., van Heugten, C. M., & Rasquin, S. (2014). Treatment of unawareness of deficits in patients with acquired brain injury: A systematic review. *Journal of Head Trauma Rehabilitation*, 29, E9-E30.
- Schmidt, J., Fleming, J., Ownsworth, T., Lannin, A. N. (2012). Video Feedback on Functional Task Performance Improves Self-awareness After Traumatic Brain Injury: A Randomized Controlled Trial. *Neurorehabilitation and Neural Repair*, 27(4), 316-324.
- Toglia, J. & Kirk, U. (2000). Understanding awareness deficits following brain injury. *NeuroRehabilitation*, 15, 57-70.
- Toglia, J. & Maeir, A. (2018). Self-Awareness and Metacognition: Effect on Occupational Performance and Outcome Across the Lifespan. In Katz, N., Toglia, J. (eds.), *Cognition, Occupation, and Participation Across the Lifespan*, 143-163. AOTA Press.